

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。
広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話を紹介しています。



大友 淳一さん

昭和22年4月11日生まれ
西中音更地区在住

西中音更へ入植

（女満別町から）

昭

和4年の春に国有地民有地として開放され、昭和5年、祖父の兄を団体長とする女満別町（現・大空町）からの団体が西中音更に入植しました。女満別町の日進というところからの入植でしたが、日進は山や坂といった傾斜地が多いため、畑を作るのが大変だったようです。そこで平坦な土地を求めた日進の人たちは、西中音更を選択しました。

未開の地の中で

（湿地との闘い）

2 年ほどかけて、北見団地としての総勢24戸が西中音更へ入植しましたが、手つかずの荒野で道路もない

上、管内屈指の湿地帯であり、ブラウ（土を耕す機械）で畑を起こしても、どンドン水が流れていくほどだったと聞いています。当然、農作物の生育も悪く、冷害に苦しむことが多かったようです。また、周囲の至る所にヤチ坊主や草木が生い茂り、女性や子どもたちが歩けなかったため、道路と排水溝の施工が第一と考え、みんなで汗を流しました。

地理的な事情

（隣は鹿追町）

西

中音更は鹿追町と隣接していて、町境の目の前が鹿追の通明小学校だったので、西中音更ではなく通明小学校に通っていた人がたくさんいました。地元の小学校は入植の翌年、昭和6年に中音更尋常高等小学校西中音更特別教授場として開校していましたが、それでも自宅から近い方へ通っていました。それだけ鹿追に近く、逆に音更の中心地へは遠かったです。道路も未整備で、橋も架かっていないため川の中に入って道なき道を進んだという話を聞いています。そのため、拓

殖鉄道（当時）の駅があった鹿追の東瓜幕で汽車に乗り、一旦新得まで行って、そこから帯広経由で音更の中心地へ向かうという、交通面でも今では考えられないような不便さがありました。買ひ物は、東瓜幕に音更町農協の支所があったので、子どもの頃はよく自転車でも米や日用品を買いに行きました。でも大人用の自転車しかなかったため、三角乗りをして行きました。

西中音更の発展

現

在の小学校から西へ約1km離れた場所に建っていた小学校を西中音更の中心である現在地へ移転させたのは昭和18年でした。以降、昭和20年から30年代にかけて、その周辺は食糧事務所や鉄工所、自転車屋、馬の蹄鉄所などが開店し、東瓜幕にあった農協支所が移転するなど地域の中心として発展しました。また、地域人口が千人を超え、児童数も200人以上で6学級編制となるなど、大変活気のある時期もありました。一方、入植当初からの地域

西中魂

（地域の団結力）

こ

の地域は、昔から「西中魂」といって、みんな

でひとつになって物事に取組んでいくといった団結力がとてつもなく強いことが自慢です。花見や夏祭りといったイベント、踊りや詩吟などの文化サークル活動も盛んです。父親、私、子どもたち、それぞれの世代で同じ年代の仲間が多いことも一体感を生む要因なのかもしれません。ぜひこれからも「西中魂」を継承して、豊かで潤いのある西中音更であってほしいと心から願っています。